

幼児の積極的保健教育

はしがき

このように、食糧事情は申すに及ばず、住居にしても、衣服その他いろいろの日常必需品の不足は、われわれ殊に乳幼児の心身の發育に何んらかの影響を及ぼしてこない筈はない——それはわれわれの生活が戦前に比して、極めて不良の衛生環境におかれてゐるからだ。

——一方、砂糖の少なかつた昨年までは胃腸病が少くなつたのに、砂糖が街にはらんして、今年にはげん消化不良症が多くなつたとか、せつかく、占領政策によつて豫防處置が普及され傳染病が少なくなつたかと思つたら、思いがけなく日本腦炎のようなものが流行しだした。豫防法の發見されない傳染だという。一般の病氣にしても、治療費はますます高くなる。良い醫藥品は品不足だという聲、こんなときに病氣になつたら、どういふことになるうというような不安な潜在意識など、いすれにしる、われわれ小兒の健康に關心をもつ母親や保護者は育兒に對し何んとなく消極的の態度をとら

恩賜財團愛育會
醫學博士

廣 瀬 興

ざるを得ないのが近頃の實情である。もうすこしよくなるであらう。それまではじつと待つてゐる態度である（それがいつくるとも誰れにもわからぬはかない望みであるのに）。これによいのであらうか。

小兒は時々刻々發育の途上にある。成人とちがつて待機を許されないのである。もし、このように育兒に對し、消極的であるならば恐らく、將來、消極的な體位ができ上がるであらう。形式や考え方こそちがうであらうが、平素でも一人つ子や、あまやかしつ子という一種の消極的體位があつた。今日の育兒の考え方もこれと同じような弊害におち入らないとはいへない。そこで、われわれはこのような條件の悪い環境にあつて、一層體位の向上をはかるために、如何なる積極的保健教育を行うべきかを考えることも必要であらう。

一、積極的とは

では、幼兒保健教育の消極的、積極的といつてもその劃然たる限界のあるわけでもなく、實際問題として、前者を養護

的、後者を鍛練的であるといつても、やはり常識的區別たるをまぬかれぬ。

由來、人體の正常なる生理作用、新陳代謝作用を營む上に必要缺くべからざる重要な二つの基本的、生物的特性がある。それは恒常性ということと、順應性ということである。

恒常性とはわれわれ人間は他の動物とちがつて、(一)恒内に體温が攝氏三十六度五分乃至三十七度に保たねばならぬ(二)雞の如きは四十度近く、蛙は高温にも低温にも耐えられる如きものもある。恒温性。(一)われわれの血液體液の濃度即ち滲透壓は〇・八五%の食鹽水と等しいものたること、それ故、血管内に蒸溜水を注入すれば血球は破壊され、心臓機能は障碍される(恒壓性)。(二)われわれ身體組織は化學的には、中性であること、若し酸性の強い肉食を常に多く攝れば酸毒症(アチドーゼス)の状態となる(恒酸性)。この三つの條件が恒内に保たれて初めて正常なすべての生理的作用が行われ、もしこの條件が破ぶられると病的状態に落ち入るのである。しかし、幸いなことにわれわれには、また一方に、順應性という特性があり、この三つの條件も練習によつて漸次ある程度までその限界を上下に廣めてゆくことができる。例えばわれわれ経験のないものが突然、火夫のように高温の汽罐室内の生活ができない。ましてや幼兒が高温圈内の生活では耐え得られないであらう。しかし、火夫は長年月の汽罐室内の「順れ」がついにあのような高温に耐えられるようになったのである。

即ちわれわれは、生後一定の恒常性の限界を順應性によつて、徐々に上下に廣めて外界の變化に耐えられるように自然に努力しているのである。この恒常性の幅は個人によつて異つてゐるのであらう。幅の廣い人ほど健康的である。いわゆる體格が標準以上でもこの幅が狭ければ廣い人より眞の健康的ということはできない。「温室育ち」の體質である。抵抗力が弱いという體質である。この幅を廣くするには、體温攝氏三十七度の線を上下に廣げた圏内で永く異狀状態にならない程度に生活せしめて、徐々になれさせることが必要である。この外界の温度の變化に對し人體の生理作用は主として、皮膚の蒸發、傳導、輻射の三作用によつて調節するのであるが、(なおこの他呼吸作用、排泄作用も關與する)従つて氣温の他の氣象條件である氣濕、氣流の三つの組合の如何に關係する故に、われわれの皮膚作用はだんだん氣温、氣濕、氣流の變化に對して順應するようになってくるのが、ぞましい。

事實。赤ん坊は氣候の變化にちぎに病氣になるのに成人はなかなかならない。「順れである」「抵抗力」ができてゐるのである。「鍛練」されたのである。即、赤ん坊は赤ん坊なりに、小兒は小兒なりに、成人は成人なりに鍛練があるわけである。

以上は體温という人體の生理状態(他の二つの恒壓性と恒酸性とともに基本的のものであるが)の一つについて述べたのであるが、これらの他、個々の生理器管、例えば呼吸、消化、循環、神經等の機能についても同じことがいえるであらう。

う。なおそのほか、各種の細菌に對する抵抗力及び免疫力の強弱にもいえることであつて、これらも、また、われわれの健康に極めて重要な要素である。幼児より都會生活のわれわれは結核に對し早く感染し、ツベルクリン反應陽性であるが徐々に微量の結核菌を受入れたためか、却つて發病し難い状態であり、田舎生活で結核菌に曝されぬものが急に都會に出で、多量のそれを受け入れたときその経過が極めて悪性であるのも免疫力の鍛鍊の差である。ルンペンが不潔のごみ箱の食物を食へあさつて發病しないのも同じ理由である。消化し易いもの無菌的なもののみ食べてゐることは却つて抵抗力を弱めることになる。これらのことは身體的のみならず精神的方面にも同ようなことがいえるであらう。即ち眞の健康は乳幼児期より年齢相應の鍛鍊それは總ての生理作用の各部門に於ての積極的そして、それはしかも綜合された鍛鍊でなければならぬ。

一、鍛鍊に必要な注意

然らば心身の綜合的鍛鍊の實施という實際問題となつてなかなか難しいこととなる。ことにその限界を定めることは容易ではない。しかし、これだけの注意は必要である。

第一に、ツベルクリン反應陽性児や虚弱兒肢體不自由兒、偏食兒、寄生虫保有兒のような異常兒に對しては特別に取扱うこと。従つて、

第二に鍛鍊の限度は個人的に定めねばならない。即ち、幼

稚園保育所のように集團的保育の場合は幾組かの階級に（必ずしも年齢にこだわらず）わけて實施すること。

第三に實施の結果に注意して、疲勞の程度、疲勞回復状態、食欲への影響、發熱の有無、機嫌の如何、便通状態、睡眠状況、精神の狀態、夢、發汗等一時的の影響の如何に注意して容易に回復する程度に行うことが必要である。例えば幾何メートルを幾分にて駈足させて幾分にて元の正常の脈搏に復した程度など、といろいろの鍛鍊に一定の標準があれば都合であるが未だそのようなものがない以上は上述の如き注意で満足せねばなるまい。幼稚園への通園がその幼児にとつて鍛鍊となつて、有效であるか、あるいは却つて有害となつてゐるかの判断をする場合の如きである。

第四に長期にわたつて觀察し幼児の心身の發育に及ぼす影響に注意し、鍛鍊の種類、方法、程度を加減することも必要であらう。

三、鍛鍊の方法

鍛鍊の方法としては一般的のものより個人的のもの、またその程度方法などいろいろあろうが、次にその委しい一つ一つの實施方は別の機會に述べるとしてその種類について列記してみよう。

(一) 必要な健康検査(上)

一、定期身體検査

(男 子)

年齢	1~	2~	3~	4~	5~	6~年
身長						
71	8.2					
73	9.0					
75	9.4	9.6				
77	9.6	9.8				
79	9.9	10.4				
81	10.4	10.7				
83	10.7	11.3	11.7			
85		11.5	11.8			
87		12.1	12.3			
89		12.8	12.8			
91			13.2	13.2		
93			13.7	13.8		
95			14.3	14.3	14.3	
97				14.6	14.6	
99				15.2	15.2	
101				15.7	15.7	16.2
103				16.3	16.4	16.4
105					16.6	16.6
107					17.3	17.4
109						18.0
111						18.8
113						19.2
115						19.3

時期、回数
幼稚園、保育所においては、その入所前に身體検査を行つて、傳染性疾患のものゝ入所を許さないようにすることは當然である。殊に結核性のものに注意し、本人のみならず、その家族に結核患者の有無を調査することが大切である。七月の夏期休暇前に第二回の検査によつて春期の保育の成績を検討し、個人個人の今後の保育の方針の参考とする。休暇後九月に第三回目の検査によつて休暇中の影響をよく観察する。第二回目は十二月か一月に冬期中に行う。第五回目は三月終

(女 子)

年齢	1~	2~	3~	4~	5~	6~年
身長						
67	8.0					
79	8.3					
71	8.4					
73	8.6					
75	8.8	9.4				
77	9.3	9.8				
79	9.8	10.1				
81	10.0	10.4	11.3			
83	10.2	11.0	11.5			
85		11.5	11.6			
87		12.0	11.7	12.5		
89		12.3	12.5	12.8		
91			12.8	12.9	13.6	
93			13.3	13.4	13.5	
95			13.7	14.0	14.0	
97			14.0	14.5	14.5	14.5
99				15.0	14.9	14.9
101				15.3	15.7	15.7
103				16.1	16.1	16.2
105				16.2	16.5	16.8
107					17.2	17.2
109					17.4	17.6
111						18.2
113						18.9

年齢、身長別標準體重表

了時に行つて一カ年間の成績を検討する。
けつきよく、四、七、九、十二、三月の五回行えば理想的である。
注意。體重、身長、胸圍の増加率に注意し殊に單に體重の標準比較のみに安心することなく、身長に對する體重増加に氣をつけることが大切である。
次に厚生省指示の幼児の標準表を上げると

その他、はやり目、水痘、百日咳のような急性のものも勿論であるが、トラコーマ、疥癬のような慢性傳染病をも注意せねばならない。

二、ツベルクリン反應検査

結核に感染の有無と、その時期を知つておくことはその後
の積極的健康保育實施にぜひ必要である。もし、感染直後であるならばどんなに外見上も、自覺的にも、他覺的にも健康的であつても少くとも、一カ年は養護的に取扱わねばならない。もし、この注意を怠れば結核は活動性となり、發病して取りかえしのつかぬこととなる。反對に感染後一二年間注意すれば、幸いに停止して一生結核は發病しないで終ることが多し。

不幸にして陽性であつたなら、更にレントゲン検査、赤血球沈降速度の測定を行つてその程度を確かめ、あるいは、その進行中か停止しているかを知つて今後の養護の方針を定めることができる。陰性なればBCGとワクチンの接種によつて豫防處置をする方がよい。

三、BCG接種

成人の結核とちがつて、幼児殊に乳兒のように年齢の少いほどその経過が不良であるから、極力感染を豫防すべきである。しかし、生活環境が極めて不衛生になつた近頃は乳幼兒の結核が年々増加の傾向にある。それ故、ツベルクリン反應の陰性の、すなわち未だ結核に感染していない乳幼兒にはなるべく早くBCGワクチンの接種が賢明である。學童以上に

はBCGも比較的普及され、實施されているが、それ以下には未だ普及されていないから殊に幼稚園保育の如きところで普及させるがよい。BCGは人工的に無毒の結核菌の微量を感染させて、免疫を作るのであるから、BCG接種後二三个月後再びツ反應を検査して人工的に陽性に轉化していることが必要である。責任者はその結果を観察していなければならぬ。

一度陽性轉化しても、數カ月あるいは一二年後再び陰性になつて免疫が消滅することがあるから、其後定期的のツ反應検査が必要となる。BCGによる人工的の陽性轉化後は自然感染による轉化後のように、特に一二年間養護的に取扱ふ必要はないといわれている。

BCGによつて免疫性を得ると、結核の發病率も死亡率も少いとされているが、種痘やヂフテリアのように強力でないから、やはりその乳幼兒をなるべく結核患者に接近させたりその他、結核に感染させるような條件や機會を作らないようにせねばならない。

X
X
X